

緊急雇用対策で外来水生生物駆除作戦

大阪府環境農林水産総合研究所・水生生物センタ -
内藤 馨

淀川のワンドと天然記念物イタセンパラは中学校の教科書で自然環境を学ぶ分野に掲載されるほど日本の河川環境のシンボリックな存在となっている。しかし、近年のワンドは外来水生植物に覆われ、ゴミが散乱し、水面下では外来魚が凄まじく繁殖している。このような状況の中、平成 18 年からイタセンパラの生息確認が途絶え、絶滅の危機に瀕している。

そこで、水生生物センタ - ではこれら外来水生生物の生態を調べるとともに、低減化のための駆除効果調査を行ってきた。これら駆除効果調査で開発した技術を活用し、緊急雇用創出基金事業で雇用した方々にお手伝いをいただき、平成 21 年度から淀川ワンドの自然環境再生試験に取り組んでいる。

調査場所と方法

外来魚は、大阪市旭区城北ワンド No.34、35、36、37、38、39 において、人工産卵床での産着卵、人工藻場トラップ、アイカゴ、地曳網等による仔稚魚や親魚の駆除を行っている。このうち、No.34、35、36 の 3 ヲ所は重点地区として休日を除いてほぼ毎日集中的に駆除を行っている。また、外来水生植物は城北ワンド群全域で駆除を実施している。

結果

平成 23 年 11 月までの駆除結果は、外来魚では No.34 から No.39 全体でオオクチバス 5,891 尾、ブル - ギル 115,627 尾を捕獲した。重点地区は、No.34 がオオクチバス 960 尾、ブル - ギル 17,457 尾、No.35 がそれぞれ 760 尾、18,152 尾、No.36 がそれぞれ 1,676 尾、22,077 尾であった。推定生息尾数 (DeLury 法による) から算出した駆除率は、No.34 がオオクチバス 47.5%、ブル - ギル 62.5%、No.35 がそれぞれ 47.9%、58.1%、No.36 がそれぞれ 50.9%、64.9%であった。外来水生植物は、ナガエツルノゲイトウを中心に 233 トンの駆除を行った。その結果、駆除を集中的に行っているワンドでは、カネヒラ等タナゴ類の稚魚が前年に比べ大幅に多くなり、また、駆除を行っていないワンドと比較すると、在来魚の割合が著しく増加し、駆除効果が認められた。

今後の方向

関係機関、市民団体等と協力して、駆除活動を継続していく必要がある。平成 23 年 8 月 28 日には、「天然記念物イタセンパラを淀川に」を合言葉に、流域市民や大学、企業などが参画した「淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク」が設立され、マンパワー - と技能を集結し、広域の環境保全活動に取り組んでいくことになった。